続・変奏曲の創作

40期

Ⅰ　テーマ設定理由

変奏曲（ある主題を基にして、その旋律などをさまざまに変化させて作った楽曲）は、楽典によれば、大きく３つの種類にわけられる。すなわち「音型変奏」「性格変奏」「シャコンヌ、パッサカリア等」である。昨年の研究「変奏曲の創作」では、音型変奏という古典派の変奏曲を扱ったので、今回はひき続き性格変奏について調べることにした。

性格変奏とは「主題に対し自由に性格的変化を行うもので、主題の構造による拘束をうけない」ロマン派以降の作曲家による変奏曲である。「性格的変化」とはどのような変化なのか？　それはバリエーションとともに、どのように進展しているのか？　自由とされているこれらの変奏曲に共通した構成があるのか？　これらのことを、いくつかの変奏曲を分析して調べ、その結果に基づいて実際に作曲してみる。

Ⅱ　研究方法

① 具体的に参考とする変奏曲を選び、どのように変奏されているかを分析する。

② 各々の曲について、バリエーションの進展のし方を分析する。（特にテーマがどこに、どのようにひきつがれているか、ということに重点をおく。）

③ 分析結果を基に、バリエーション間の関連性を見い出し、これらの変奏曲に共通した構成といえるものが存在するかを調べる。あるならば、どのようなものか？

④ ③までの結果をふまえて、実際に作曲する。

☆①でとりあげた曲

『即興曲　変ロ長調　Ｏｐ．１４２の３』（Schubert）

『厳格な変奏曲』（F.Mendelssohn ）

『パガニーニによる大練習曲　第６番「主題と変奏」』（Franz Liszt ）

『ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ　作品２４』（Brahms）　※フーガは除く

☆自作曲の主題として選んだ曲

『歌曲「我が富は小さき小屋のみ」による８つの変奏』（L.van Beethoven ）の主題部分

Ⅲ　研究内容

まず、上に挙げた４曲の各々のバリエーションについて分析し、表にまとめた。(表１）分析するにあたって、１つの変奏曲に含まれるバリエーションの数が、とても多いことに気がついた。最も多かったのが『ヘンデルの主題による変奏曲』（Brahms）で、２５曲のバリエーションを持っている。これだけものバリエーションが、何の関連性もなしに、個々別々にならんでいるとは思えない。これらのバリエーションは、どのような関連性に基づいて並んでいるのだろうか。一見、無造作に、個々に並んで見える各々のバリエーションに、相互の関連性を見いだすために、仮説的な試みとして次の方法を用いた。

① 各々となり合ったバリエーションの関連性を見つける

→となりどうしに関連性の見られないところで、いくつかのグループに区切る。

② ①でとらえられた各々のグループについて、全体的に何が関連しているかを探る。

③ 以上の結果から、バリエーション部分全体の構造を図式化する。

表1　分析その1　ヘンデルの主題による変奏曲（ブラームス）

テーマ	①拍子	②拍子	③小節数	④ 音のイメージ	⑤ 変奏技法	⑥ テーマがどこに、どのように表現されているか
V.1	変ロ長調	4/4	8小節	・穏やかで気品がある。 ・長音符が多くはりやか		
V.2	変ロ長調	4/4	8小節	・animato ―生き生きして、活気があり。 ・軽快、はずれよい。	・両手の1小節と2小節のリズムに終止している。	・テーマラインの始の音が、ほとんどそのまま、V.1の各拍の頭に再現されている。 ・和音進行は変化せず、継承されている。
V.3	変ロ長調	4/4	8小節	・animato ―生き生きと ・流れるような、なめらかさがある。	・3連符の経過的なメロディーと、4声のハーモニーによる進行。	・テーマラインの基本的な骨組となる音（始の音など）は、ひきつがれている。しかし、経過的に変化している部分も多い。 ・和音も基本的には同じだが、経過が入る。
V.4	変ロ長調	4/4	8小節	・やさしく、かわいらしい ・シンプル。	・1小節(右手)と、2小節(左手)による、かけ合いをもとにした進行。	・テーマラインの1音1音そのものは表れていない。 ・和音の進行がほとんどそのまま受けつがれており、又、フレーズ内の音のつながり（上行、下行）が同じなので、テーマにとても忠実にキープしている。
V.5	変ロ長調	4/4	8小節	・力強く、はずれよさがある ・きっぱりしている。	・1オクターブ（右、1小節目の音階的進行、左、ベースとメロディー）を基本とした進行。	・テーマラインは、左手のベースの中に表現されている。（部分的に）又、右手は、テーマラインの1音1音はとどめないものの、上行・下行の流れを経過的に示している。 ・和音は、少しずつ骨組が変化してきた。（特に、もりあがる部分など）
V.6	変ロ短調（自然）	4/4	8小節	・ゆったりとしている。 ・すきとおっていてさびしそうでもある。	・両手のオクターブによるかけ合いの進行。	・テーマラインは直接表れておらず、音の流れとしてわかる程度。しかし、曲想が劇的に変化したため、テーマの存在はわかりにくい。（しかし、1部分的に、テーマラインの表れているところもある）
	変ロ短調	4/4	8小節	・ゆっくりとしている。 ・すきとおっていてさびしそうでもある。	・両手のオクターブによるかけ合いの進行。	・フレーズ内での流れは、テーマのものを受けついでいるが、テーマそのものはわかりにくい。

＜①について＞

まず、となり合う２つのバリエーション間に共通している点を、分析の表から読みとれるだけ書き出していった。となり合うバリエーションの間の共通点は、とても多く存在していた。これらのバリエーションは、ある１つの主題の変奏であるという意味で根本的に共通しているが、それ以外に変奏技法の面では、おおよそ次のような共通点があった。

・基調とする変奏の音型（３連符による律動的変奏、和音変奏など）

・音の移動のし方（かけ合い、シンコペーション風の交互連打など）

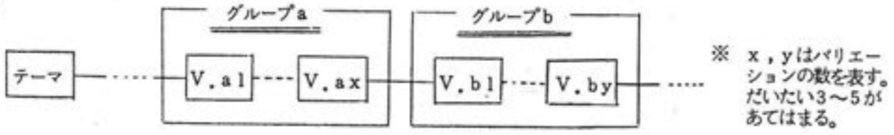
・特徴的なリズム

・バリエーションの特徴的なメロディーや、対旋律の部分の主要音。

・曲想

しかし、そうは言ってもすべてのバリエーションの間が、必ず何らかの関連性を持っているわけではない。前のバリエーションとのつながりを全く持っていないものが、ところどころにある。そこで、となり合うバリエーションの間の関連性がないと思われるところで区切って、何らかの関連性をもつバリエーションを１つのグループにまとめていった。このようにすると変奏曲のバリエーション部分には、関連性を持つバリエーション３～５曲から成るいくつかのグループができあがった。(図１)

図１



＜②について＞

①でとらえられた１つ１つのグループ内には、どのような関連性（つながり）があるのだろうか？①で行った作業（となり合うバリエーション間の関連性を読みとれるだけ書き出す作業）をすすめていくうちに、となり合うバリエーション間の共通点（前述）は、単にとなり合うものだけに共通しているのではなく、もっと多くのバリエーションにわたって、次々と受けつがれていることが多いように思った。例えば、バリエーション１と２の間の共通点が、バリエーション３、４……にも受つがれていたりする。しかし、それは全くそのまま再現されていくのではなく、バリエーションとともに多様に変化する。あるものは、ますますその共通点が大きく利用されるように進展し、又、あるものは、その共通点が、しだいに消されていく。又、変化していく過程で、その共通点の要素を含みながら、新しい要素を作り出し、後へと伝えていくものもある。このように、バリエーションの間には、となりどうしの関連性をこえた進展があることがわかった。ところで、ある共通点における展開が終わると、今度は新たに前のものとは全く違う別の共通点が登場し、それが発展していくことになる。そして、新しい共通点の要素を含むバリーションというのは、新しいグループのはじまりになっている。つまり、１つのグループの中では、前に述べたような共通点（それは各グループ１つとは限らない）が、そのグループに属するバリエーション全体を通じて多様に展開しているのである。特に、１つのグループ内におけるテーマのうけつがれ方（テーマが、どこに、どのように出ているか、ということ）については、さまざまに展開されているものの、表２に示すような共通点を持っていることがわかった。

＜③について＞

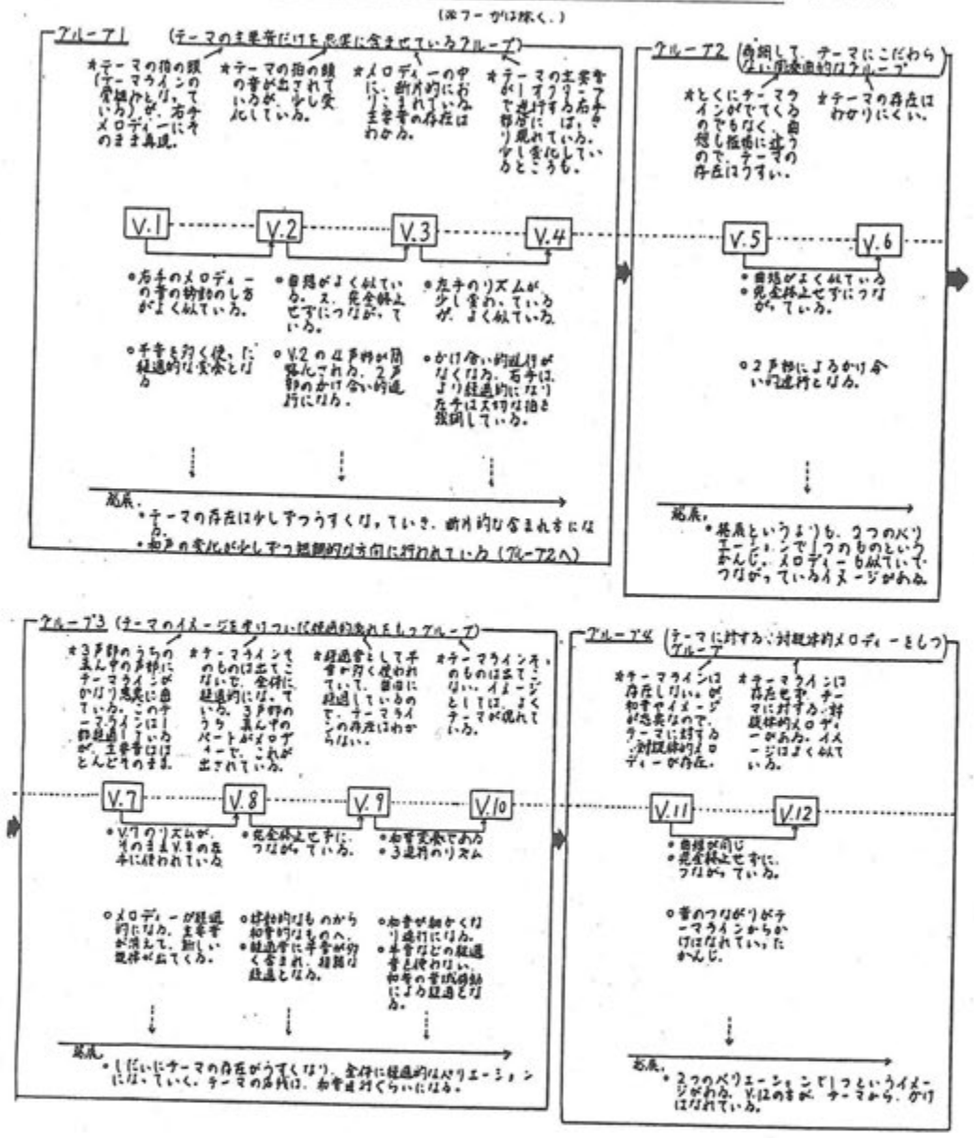
１つ変奏曲のバリエーション部分がいくつかのグループにわかれていることが明らかになり、それら１つ１つのグループ間には②で述べたような関連性があることもわかった。それでは、個々のグループとグループの間には何らかの関連性があるだろうか。あるとすればどのようなものか。それを調べるために、『厳格な変奏曲』『ヘンデルの主題による変奏曲』『パガニーニによる大練習曲　第６番「主題と変奏」』について、１グループごとの関連性を表にまとめた。（図２、次ページ参照）

図２より、各変奏曲１グループごとの特徴（それが最もよく表れているものと考え、テーマの受けつがれ方に注目した。）を書き出すと次の表２のようになった。

表２

グループ	厳格な変奏曲 メンデルスゾーン	ヘンデルの主題による変奏曲 ブラームス	パガニーニの主題による変奏曲 リスト
グループ1	テーマラインを全体的に、比較的忠実に出したグループ	テーマの主要音だけを、忠実に含ませてあるグループ	対旋律的メロディーを持ちながら、テーマラインを忠実に再現したグループ
グループ2	テーマの主要音だけを忠実に含ませてあるグループ。	移調して、テーマにこだわらない間奏曲的なグループ	対旋律的部分を持ちながら、テーマラインの1部を利用して変奏したグループ
グループ3	テーマのはじめだけを利用した即興的、経過的な流れをもつグループ。	テーマのイメージをうけついだ経過的な流れをもつグループ	テーマのイメージをうけついだ経過的な流れをもつグループ
グループ4	テーマに対する対旋律的メロディーをもつグループ	テーマに対する対旋律的メロディーをもつグループ	テーマラインに比較的忠実に、しめくくりの役割をもつグループ。
グループ5	しめくくりとして、しだいにテーマを明確にしてゆくグループ	テーマの1部分を使った変奏、対旋律的メロディーをもつバリエーションも含むグループ	
グループ6		テーマのフレーズ単位の音域の動きだけを残したグループ	

図２　ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ，作品２４　(Brahms)



前ページの表２から、バリエーション部分におけるテーマの受けつがれ方の進展とは、大きく見て次のようになっているのではないだろうか？まずはじめ（バリエーション１，２などの部分）は、比較的テーマに忠実な変奏から入っていく。そしてバリエーションで多様に展開されていくうちに、しだいにテーマそのものから、かけはなれていく。すなわち、しだいにテーマの一部だけや、テーマの曲想だけを残しただけの変奏にとってかわる。そしてある程度の限界まで進展してしまうと、最後はまた、テーマの存在が明確な変奏でしめくくられる。

テーマの受けつがれ方の進展について、表２からもう少しくわしく読みとって図式化してみると、変奏曲のバリエーション部分の構造は、次のようにテーマをもとにして①から⑤へと連続していることが明らかになった。

・テーマ

①テーマを全体的に比較的忠実に出した変奏（グループ）

②テーマの主要音だけを忠実に含ませてある変奏（グループ）

③テーマそのものはうけついでいないで、イメージだけをうけついだ、即興的、経過的な流れをもつ変奏（グループ）

④テーマに対する対旋律をもつ変奏（グループ）

⑤テーマに比較的忠実に、しめくくりの役割をする変奏（グループ）

ところで先程、図２のような表をまとめる際『即興曲　変ロ長調　Ｏｐ．１４２の３』については、バリエーション数が少なくグループ構成はできないだろうと考えたので、その作業を行わなかった。が、上のような結果を得た後で考えてみると、この曲においては、バリーションの１つ１つが、他の３曲における１グループの役割を果たしているように思う。テーマの受けつがれ方の進展という面では、比較的忠実なところから発展し、テーマの面影を見せてしめくくられているという原則を、バリエーション１つ１つの単位で満たしている。

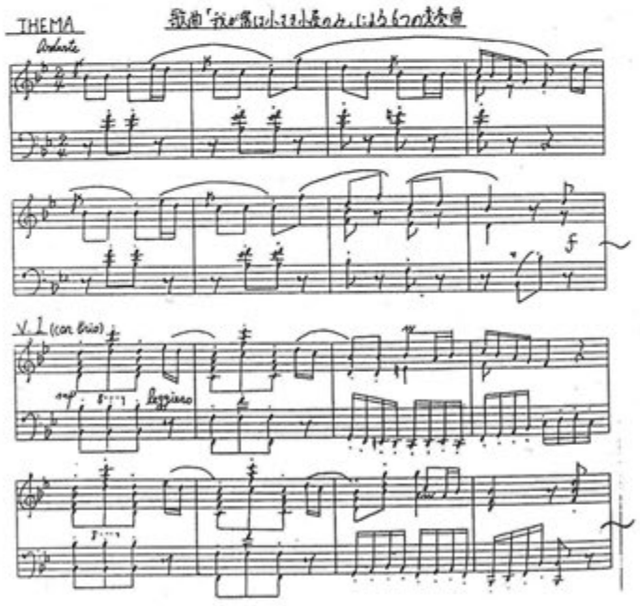
以上の結果をふまえて、自分で作曲したのが以下の楽譜の曲である。（ここでは、スペースの関係上、テーマ、各バリエーションの最初の８小節部分だけを提示する。）作曲のテーマとして使ったのは、歌曲「我が富は小さき小屋のみ」による８つの変奏曲』（L.van.Beethoven)の主題部分である。

一般的に、性格変奏といわれるこれらの変奏曲は、グループ構成できるように、バリエーションが多いが、私にとってそれだけのバリエーションを作るのは不可能なことなので、シューベルトの『即興曲 Op.１４２の３』のように１グループごとの構成上の役わりを、１バリエーションの単位で満たすことにした。バリエーションは全部で６曲とする。

この曲では、テーマは各バリエーションに次のように再現してある。

☆バリエーション１　……　右手に、テーマのメロディーの主要音を明確に再現した。

☆バリエーション２　……　符点の中にテーマのメロディーを断片的に再現した。経過的になっ



ている部分もある。

★バリエーション3……テーマそのものは再現していない。経過的、即興的に動いており、流れはとらえられる。

★バリエーション4……テーマは全く存在しない。調子や曲想が全く違う。テーマに対する対旋律的バリエーション。

★バリエーション5……左右の和音部分に、主要音が忠実に再現されている。後の部分は経過的。

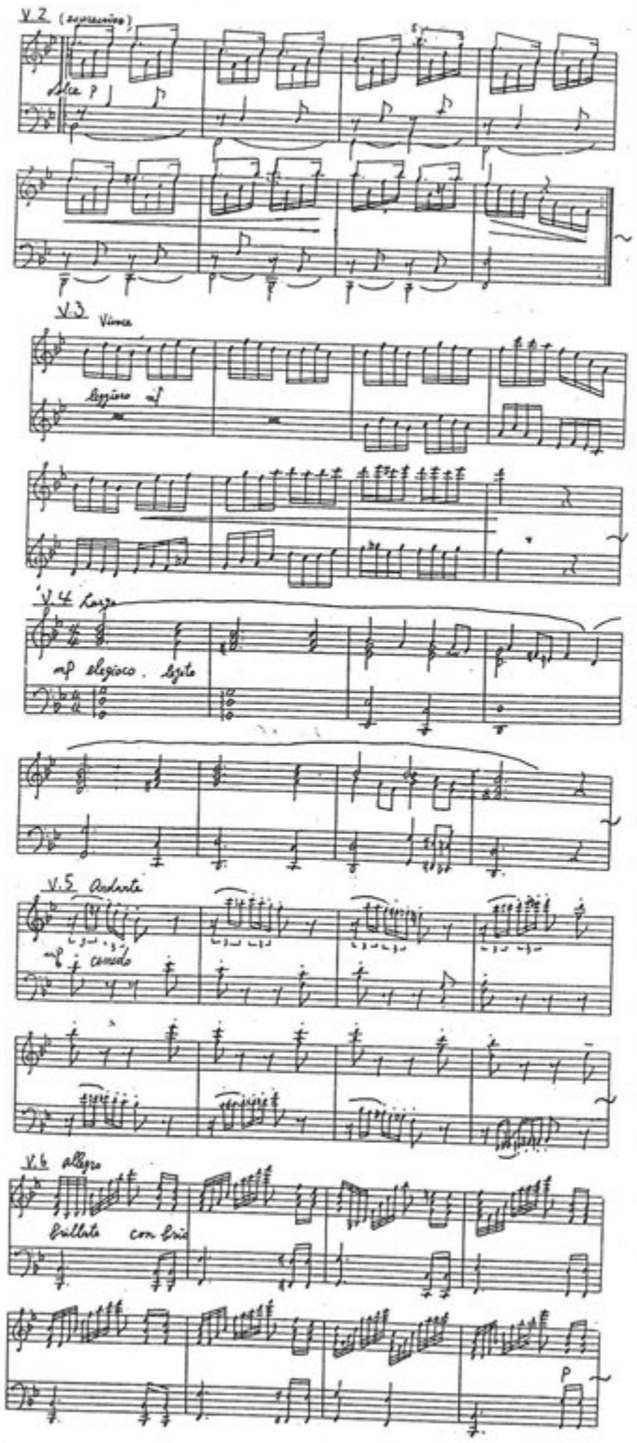
★バリエーション6……テーマの主要音は忠実に再現されている。他の部分は分散和音でもりあがり、しめくくり。

Ⅳ 結　果

楽譜参照のこと。

Ⅴ 感　想

今年の研究で扱った曲はかなり難しかったので、分析の上で手におえないところも多かった。又、自分では理解していても用語の知識がほとんどなく的確に書き表せていない部分も多かった。もう少し、基本的な知識を身につける必要があると思う。

自作曲の方は、時間がなくてあせったけれど、できあがって良かったし、自分でもだいたい満足している。

昨年、今年と2回にわたる変奏曲の研究で、少しは私なりに変奏曲について理解できたので良かったと思っている。